

シンポジウム

A

「子どもの活動が地域社会を創る」

座長：木下 真（木下編集事務所）

話題提供者

笠間浩幸（同志社女子大学教授）

宮下孝広（白百合女子大学教授）

新崎国広（大阪教育大学准教授）



子どもへの信頼感が“子どもの参画”を実現させる

シンポジウムの話題提供の一番手である笠間先生がお話されたのは、砂場遊びについて。子どもだけではなく、大人も夢中になって遊ぶのが笠間先生の仕掛ける砂場遊びだ。2006年から行っている神戸市須磨海岸でのプレイフルサンドアートの催しでは、300人規模の人々が、終日砂場遊びを楽しむという。幼児から大人まで、世代も性別も人数も関係なく、みんなで協力し合いながら創り上げていくところがサンドアートの魅力だ。笠間先生は、我を忘れて遊ぶ機会を子どもに提供していくことで、子どもの遊ぶ権利を守るとともに、遊びを核とした地域づくりへとつなげていきたいという。

二番手の宮下先生は、絵本の読み聞かせの場で、小学生を聞き手ではなく、読み手にする活動を行っている。子ども自身が読み手となることで、子どもは情報の受け手ではなく、送り手になる。長野県塩尻市で行っている読み聞かせの会には、子どもや保護者だけではなく、地域の高齢者も参加する。読み聞かせに発達の・教育的意義だけではなく、社会的な経験という意義も加えることで、絵本が子どもの内面で完結せずに、人とのかかわりを生むツールになるのだという。

最後の新崎先生の話提供は、福祉教育とボランティア学習についてだ。従来の地域福祉の学習は、学校や社会福祉協議会が啓蒙という形式で行ってきた。そこには、地域住民同士の出会いや学び合いという視点が欠けていた。知恵あるものが上から意識変容や行動変容を求めるのではなく、住民が相互に影響を与

え合う学びの場を広げていきたいという。新崎先生は、福祉を「“ふ”“だんの”“く”らしの”“し”あわせ」と言い換えた。コミュニティの中で多様な人々と出会うことで、子どもたちは教師や親以外の地域の人々から学ぶべきことがあること、自分がいまのままでも誰かの役に立てる価値ある存在であることに気がつくという。

3人の先生方の発表は、分野が異なっていて、まとめることは難しいが、共通点として、“子どもの参画”という言葉が浮かんできた。発達心理学者のロジャー・ハートが理論化しているが、“参画”とは、子どもが大人の活動の駒とされるような参加の仕方ではなく、必要とされる役割があったり、企画に関与できたり、意見交換が自由になされるような参加の仕方のことである。子どもの参画を実現するには、大人側に子どもを信頼する姿勢が不可欠だ。子どもとともに、子どもの力を借りながら、活動を進めていく。今回の3人の先生方の発表は、その好事例だと思われる。自分たちの行動や発言が頭ごなしに否定されず、たとえどんなに幼く、拙い行動や発言であっても、受け止めてもらえる。そのことによって、子どもたちもまた大人に対する信頼感を高めていく。地域社会はそのような信頼の好循環によって創られていくことを、3人の先生方は示してくださった。また、これらは大人同士の地域づくりの場合にも通用する普遍性をもった考え方だといえる。

（木下 真）

シンポジウム A

砂遊びで育つ子ども、 つながる人々と地域社会

笠間浩幸（同志社女子大学教授）

たかが砂場・砂遊び、されど

それは、子どもたちの成長・発達の可能性を大いに引き出す。子どもは砂に触れた瞬間から遊びを始める。自由に楽しい遊びの中で子どもたちは無意識のうちに五感や深部感覚（筋肉・関節・バランス）への刺激を受け、型抜きや泥だんご作りなどを通して、モノの操作や手指の巧緻性を高め、想像と創造を拓ける。試行錯誤から科学的な思考を深め、トラブルやその修復、共同作業等を通して社会性を磨く。このような、充実した遊びへの満足は自己肯定感を大いに高める。科学的な児童心理学の父とも呼ばれるスタンレー・ホール（Stanley Hall:1844-1924）は、我が子の砂遊びを長期観察する中で、「多様な興味と活動を統合させる砂遊びは、教育として理想的である。教育においては、理想的なものほど实际的であり、实际的なものは理想的である」と述べている（津守真訳『子どもの世界をどうみるか』1987）。

砂遊びがつなぐ人と人

2006年から始めた「プレイフルサンドアート in 須磨海岸」は今年で9回目を数えた。こども環境学会関西大会において初めて企画したものだが、関係者がその継続を強く希望し、今日に至る。たかが砂遊びではあるが、関西圏の教員、学生、行政職、建築士、プレイリーダー、

主婦、会社員たちが集まり、地元商店街、消防署、ライフセーバーらの協力の下、毎年300人規模の砂遊びを1日中楽しむ。須磨以外でも砂遊びや砂場づくりを通して、人と人とのつながりやネットワークが築かれつつある。東日本大震災以降は、福島県内でも砂場づくりや親子の砂遊びワークショップの開催を通して、多面的な人々のつながりと挑戦が広がっている。

砂遊びが地域社会を創る

人がつながるには、そこに何らかの「思い」がある。現象として見られる砂場づくりや砂遊びのイベントも、根底には幸せな子ども時代を願う大人たちの思いがあり、その思いが何がしかの形の実現へと向かった時、地域社会を動かす大きな力となる。事実、1885年、ボストンに創られた小さな砂場が、全米の児童公園設置運動の端緒となった。今日でも北海道や福島県内の屋内砂場や砂遊びのプログラムが、地域の子どもの（子育て）文化の形成につながっていることは決して偶然ではない。昨年、国連子どもの権利委員会は、「遊びは子どもの権利」という考えを強く推進する「General Comment No.17」を発表したが、子どもの遊びを核とした地域の創造は、子どもが子どもらしく生き、人間らしい社会を創るための当たり前の一歩と考える。



1歳児の砂遊び



須磨海岸（写真：木津田秀雄）



シカゴの児童公園（1907）



郡山市の室内砂場



〈プロフィール〉

1958年生まれ、福島県育ち、大阪教育大学大学院修了。2004年、北海道教育大学助教授から現職。遊びや子育て環境、特に砂場の歴史、砂遊びの展開を25年間追究。砂場の設置監修や保育者、親子を対象とするサンドアート・ワークショップを全国で開催。現在は、福島県内の砂場の設置や砂遊びを支援する。IPA（子どもの遊ぶ権利のための国際協会）日本支部代表。著書等に、『〈砂場〉と子ども』（東洋館）、『保育者論』（北大路書房）、『DVD 乳幼児期の砂遊び』（新宿スタジオ）他。

シンポジウム A

読み聞かせ活動が 多世代間コミュニケーションを創る

宮下孝広（白百合女子大学教授）

絵本の読み聞かせは、通例、家庭において親子間でなされることに始まります。親子の情動的な関係の基盤形成に貢献し、その関係性のもとで、その後の認知的・社会的側面の発達が導かれていくという重要性を持っています。子どもの成長に伴って読み聞かせの場はさまざまに広がり、園や学校、子育て支援センターや図書館等を通じて、子ども達の生活に深く浸透していると言ってよいでしょう。

ただ、読み聞かせの場面では、子どもたちは基本的に聞く立場に置かれます。現在では小学校以上の児童や生徒に対しても読み聞かせが行われていますが、やはり聞くことに重点が置かれることには変わりありません。もちろん、小学校に入学すると文字の読み書きの教育が公式に開始され、そこでは一人でテキストに向かうことが求められます。低学年では一斉に音読する機会を多く持ちますが、次第に黙読に移行していきます。しかし、発達が社会的相互作用のなかで進められていくと考える立場に立てば、自己内相互作用として十全に読書活動を行うことができるようになる過程で、特に読みを獲得して間もない児童期には、例えば他者に対して読み聞かせること、そのために文章を理解し自らの表現とするために読みを鍛えていくことが身近に実践できるような読書の環境が必要であると考えられます。

塩尻市市民交流センターと白百合女子大学生涯発達

研究教育センターが共同で進めている「読み聞かせ交流会」はまさにそのような意義を持つ活動として展開しています。そこでは、あえて小学生に読み手になってもらうと同時に、高齢者にも参加を求め、両者が同じ「読み聞かせコミュニケーション」という立場で乳幼児に向き合う機会を創っています。小学生と高齢者がお互いの活動を支え合うとともに、乳幼児や保護者を含めて、絵本の読み聞かせを媒介とした多世代間の交流を創り出すことが試みられています。

この実践研究を通じて明らかとなったことは、絵本の読み聞かせをコミュニティにおける社会的な活動に拡張することを通じて、それに関わる多様な人々の発達を促す場を生み出しうることです。絵本の世界に接すること、それを読み聞かせる小学生や高齢者の行為に接することを通じて、乳幼児の発達を促すとともに、小学生・高齢者にとっての読み聞かせという行為が発達的・教育的意義を持つこと、さらには小学生が高齢者と関わっていくという社会的な経験、逆に高齢者にとって小学生を導く経験がいわゆるジェネラティビティの発揮を促すことなどです。その活動の中心となる一角を小学生コミュニケーションが占めており、絵本の読み聞かせが、文学作品をはじめ多様な読書活動を生涯にわたって展開していく橋渡しの役割を担っていることについて、さらに考察していきたいと思います。



〈プロフィール〉

1956年生まれ。白百合女子大学文学部教授、児童文化学科長・発達心理学専攻主任。日本子ども学会常任理事・編集委員長。調布市社会教育委員。東京大学大学院教育学研究科博士課程中退、東京大学教育学部助手、白百合女子大学文学部専任講師・助教授を経て、現在に至る。専門は発達心理学、教育方法学。小学校での授業研究の傍ら、PTA活動・地域活動にも参加。『新版 発達心理学への招待』（共著、ミネルヴァ書房）、『教育の方法と技術 第2版』（共著、学文社）などがある。

学校と家庭・地域をつなぐ 福祉教育・ボランティア学習

新崎国広 (大阪教育大学准教授)

福祉教育は、1970年代から計画的・意図的に展開された。その背景には、1960年代後半からの高度経済成長による地域社会や家庭の変化が大きな要因だと言われている。東京都社会福祉協議会福祉教育研究委員会(1971)では、福祉教育は、①基本的人権を守り、尊重するための人権感覚および意識の開発、②現行社会福祉制度の理解および生活者としての知識、経験に基づいての問題、③問題解決のための実践意欲の涵養と実践方法の体得、といった3つの局面における探究が必要であると見解を示している。福祉教育は、単に知識として福祉を学ぶだけではなく、人権意識や共生意識の醸成や、社会的課題に立ち向かう力を育成することで、「地域における共生の文化を創造」をめざすことが大きな目的であるといえる。

しかし、現在の福祉教育は、学校教育と、社協を中心とした地域福祉学習が個々別々に展開されており、個人の意識変容や行動変容に重点が置かれていたといえる。このため、コミュニティを構成する人々相互が、出会いと交流の中で往還的に学び合い相互に影響を与えあっていったかといったコミュニティの視点からの実践研究は、今まであまり注目されていなかった。

日本では、コミュニティ意識の希薄化や核家族化による家庭機能の弱体化により、セルフネグレクト、ひきこもり、児童虐待等の問題は、今日的社会的問題としてますます深刻化している。このような状況の中で、2013年6月に、「子どもの貧困対策法」が成立した。

今、6人に一人の子どもが貧困環境の中で生活してい

る。日本において、特に子どもの「相対的貧困率」が急激に増加している。国民全体では、1985年度12.0%が2013年度は16.0%に増加した。子どもの貧困率は、1985年度10.9%が2013年度には16.3%と初めて国民全体の貧困率を上回った。ひとり親世帯の貧困率は、日本が58.7%で、世界で最もひとり親世帯の貧困率が高い現状がある。また、先進国の中でも、親が働いている家庭での貧困率が高いのが日本の貧困の特徴である。(出典：阿部 彩『子どもの貧困Ⅱ』岩波新書、2013)

貧困は、単に経済的な問題だけではない。学習困難、高校中退、非行、虐待など、貧困が生み出す社会的孤立の問題は、子どもの成長を脅かし、「貧困の連鎖」の大きな原因にもなっている。

このような状況のなかで、貧困の連鎖を断ち切るために「地域の子どもたちは地域で育てる」をスローガンに様々な地域で子どもたちの「ナイトスクール」や大学生・地域住民による学習支援の取組が始まっている。筆者も住吉区社協が取り組んでいる「住吉学びあいサポート事業」に参加し、子どもたちの学びを応援している。このような取組は、厳しい生活環境の中で生きる中学生と大学生・地域住民との交流や学びあいを通じ、学習支援だけでなくお互いの自己有用感を育む活動にもつながっている。

本シンポジウムでは、子どもたちと学校と地域・家庭の協働による福祉教育・ボランティア学習実践の意義について共に考えたい。



〈プロフィール〉

大阪教育大学教育学部人間科学講座・大学院教育学研究科健康科学専攻(夜間大学院)。1978年、肢体不自由児施設にてソーシャルワーカーとして従事。働きながら、社会福祉士資格取得、大阪教育大学大学院健康科学専攻修士課程修了。1999年専門学校専任講師、2001年中部学院大学助教授を経て、2003年4月より現職。＜著書＞『なぎさの福祉コミュニティを拓く-福祉施設の新たな挑戦』(編著) 大学教育出版。『福祉教育のすすめ』(編著) ミネルヴァ書房、2006。＜社会的活動＞日本福祉教育・ボランティア学習学会理事。